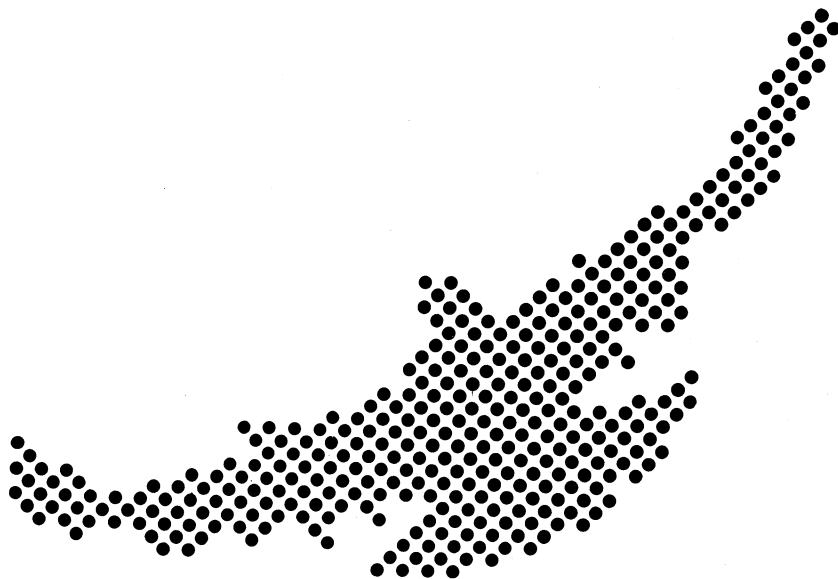


第13回エンジニアリング功労者賞 受賞者紹介



平成 5 年 11 月

財団法人 エンジニアリング振興協会

受賞者名簿

(50音順)

〈グループ表彰〉国際協力

名 称	代 表 者 ・ 構 成 員 数
インド・光ファイバーケーブル製造プラント建設チーム 〔古河電気工業(株)〕	豊 田 邦 彦 (古河電気工業(株) 光通信事業部 MP建設チーム長 (当時)) 33名
インドネシア・西ジャカルタ洪水防御システム建設プロジェクトチーム 〔(株)日立製作所、大成建設(株)〕	水 田 英 直 (株)日立製作所 機電事業本部 公共システム部 部長 (当時) し 宍 戸 尚 夫 (大成建設(株) 海外事業本部 インドネシア工事事務所 所長 (当時)) 55名

〈グループ表彰〉エンジニアリング振興

名 称	代 表 者 ・ 構 成 員 数
CAD化推進グループ 〔旭エンジニアリング(株)〕	か 河 村 幸 二 (旭エンジニアリング(株) CAD室 室長) 8名
ハウステンボス・プロジェクトチーム 〔(株)日本設計、清水建設(株)、日本国土開発(株)、鹿島、大成建設(株)、三井不動産建設(株)〕	斎 藤 繁 喜 (株)日本設計 取締役 建築設計部長 (当時) こ お り 郡 公 剛 (清水建設(株) ハウステンボス建設所長 (当時)) 6名
マレーシアSMDSプロジェクトチーム 〔日揮(株)〕	ち り 森 本 省 治 (日揮(株) 国際事業本部 SMDSプロジェクトチーム プロジェクト マネジャー (当時)) 98名

〈グループ表彰〉環境国際貢献

名 称	代 表 者 ・ 構 成 員 数
中国・華能瑤璜発電所排煙脱硫プラント建設プロジェクトチーム 〔三菱重工業(株)〕	ね 根 本 弘 之 (三菱重工業(株) エンジニアリングセンター プロジェクト主務 (当時)) 50名

〈個人表彰〉 国際協力

氏 名	現 職
しみずがわ こう じ 清水川 治 二 昭和15年3月13日生	(株)竹中工務店 国際事業本部 副本部長
とみ せ みなみ 富 瀬 南 昭和16年1月11日生	鹿島建設(株) 建設総事業本部東京支店 海外建設部統括部長
とら たに とし ろう 虎 谷 俊 朗 昭和13年2月23日生	大成建設(株) 国際事業本部営業部 部長

〈個人表彰〉 協会活動

— 協会創立15周年 —

氏 名	現 職 (旧所属)
いし ぎま ひで たけ 石 崎 秀 武 清水建設(株) 技術開発センター 土木生産技術開発部長	清水建設(株) 技術開発センター 土木生産技術開発部長
おおく ぼ や た 大久保 弥 太 日揮プラントック(株) 取締役社長(日揮(株))	日揮プラントック(株) 取締役社長(日揮(株))
お ほん しげ のぶ 小 原 重 信 名古屋商科大学 産業経営学科教授(川崎重工業(株))	名古屋商科大学 産業経営学科教授(川崎重工業(株))
かわ にし まさる 川 西 勝 日揮(株) 経営企画室 管理チームマネージャ	日揮(株) 経営企画室 管理チームマネージャ
たか ぶ もと ゆき 高 部 素 行 清水建設(株) エンジニアリング本部 副本部長	清水建設(株) エンジニアリング本部 副本部長
ちや き こういちろう 茶 木 康一郎 東洋エンジニアリング(株) 前任理事 技術企画・管理本部長	東洋エンジニアリング(株) 前任理事 技術企画・管理本部長
てら おく ひろし 寺 奥 博 (株)大林組 エンジニアリング本部 企画部長	(株)大林組 エンジニアリング本部 企画部長
はし もと ゆき お 橋 本 幸 雄 (株)新潟鐵工所 顧問	(株)新潟鐵工所 顧問
ひら おか まさ かつ 平 岡 正 勝 京都大学 工学部教授	京都大学 工学部教授
もり むら やす お 森 村 恭 郎 千代田化工建設(株) 専務取締役	千代田化工建設(株) 専務取締役

〈グループ表彰〉 国際協力

○インド・光ファイバーケーブル製造プラント建設チーム

〔古河電気工業(株)〕

代表者 豊田邦彦 (古河電気工業(株) 光通信事業部 MP建設チーム長 (当時))

メンバー 33名

インド国マディヤ・プラディシュ州の電子開発公社との間に、光ケーブル製造に関する技術援助契約を1986年7月に調印、また設備売買契約を1987年5月に調印、同州ボパール市に3年の建設期間をかけて、プリフォームの合成から光ファイバーのケーブル化に至るまでの一貫した光通信ケーブル工場を建設した。

当時インドは光ファイバー製造技術を持っておらず、これに対して本プロジェクトはVAD法による全合成プリフォーム製造技術を提供するものであり、さらに現地の環境に対応させるために随所に工夫を凝らして、平成2年10月にインド国初の実用的国産ファイバーを誕生させた。現地チーム員の努力は勿論のこと、国内チームの積極的な支援もあり、ほぼ契約工期通りのプロジェクト完了となり、マディヤ・プラディシュ州は勿論のことインド政府関係当局の高い評価を得ている。

現在、工場は単一モードファイバーと多モードファイバーを合わせて、年間35,000kmファイバー長を生産する能力を有している。このように本チームはプラント建設とともに最新の製造技術の技術移転を効果的に遂行し、インド国内の光通信網の拡充、近代化と共に産業経済の発展に大きく貢献した。

○インドネシア・西ジャカルタ洪水防御システム建設プロジェクトチーム

〔(株)日立製作所、大成建設(株)〕

代表者 水田英直 (日立製作所 機電事業本部 公共システム部 部長 (当時))

同 穴戸尚夫 (大成建設(株) 海外事業本部

インドネシア工事事務所 所長 (当時))

メンバー 55名

インドネシアの首都ジャカルタ市西部及び中央地区は、議会や大統領官邸をはじめ、各国大使館、商業施設が林立する政治・経済の中心部であり、大半が標高5m未満で、海岸線に近く位置しているが、既設水路の未整備に加え、満潮時には水路にバックウォーターが発生し、水の流れが悪くなる状態であるため、毎年雨期に発生する洪水により多大な経済的損失を招いてきた。

サリナタムリン排水機場は、インドネシア政府公共事業省が1965年以来推進している西ジャカルタ洪水防御システム・プロジェクトの一環として建設され、河川改修と近代的ポンプ場を通じてジャカルタ市の752haの地域を洪水から防護することを目的として、円借款プロジェクトとして実施された。

1987年8月、日立製作所が土木・建築を担当する大成建設並びに現地会社2社との共同企業体で受注して、翌1988年10月に機器の納入を完了、引続き据付工事を開始し、契約工期である1989年10月に無事、機場の引渡しを完了した。

最新の技術を駆使した高い信頼性を有し、毎秒40トンの総排水量を誇る同国最大のポンプ場であり、首都ジャカルタ市の洪水防御プロジェクト計画の一翼を担って実稼働に入っている。毎年雨期に地区一帯が洪水に見舞われているが、本機場周辺だけは、防御が確実に維持され、日本及び同国内外で高い評価を受けており、国際協力に大きく貢献した。

〈グループ表彰〉 エンジニアリング振興

OCAD化推進グループ

〔旭エンジニアリング(株)〕

代表者 河村 幸二 (旭エンジニアリング(株) CAD室 室長)

メンバー 8名

配管設計を中心とするプラントエンジニアリングのCAD化は、エンジニアリング企業にとって長年の課題であり、大手企業を中心に開発が進められてきた。一部の企業において自社用として実用化がなされているが、汎用的商品レベルとして真に実用化されたものは殆ど見当たらない。特に我が国の実情に合った各種図面の出力やデータベースを備えているものは外国製のものでは存在しない。

本チームは長年にわたるソフト開発とデータベース蓄積と利用技術の開発をもとに本分野での実用的汎用配管CADシステムEYECADを完成させた。この実績をもとに我が国のエンジニアリング企業への導入が進みつつあり、プラントエンジニアリングの高度化に貢献した。外部ユーザー17社のうち11社がENAA会員企業であり、高い普及度を得ている。

従来システムとの比較して、(1)豊富なデータベース内蔵で導入即戦力となる。(2)現場に受け入れ易い精密で高精度の図面が得られる。(3)変更に強いシステムであり各種の変更に一貫して対応できる(4)高速3次元処理ができるなどの特徴がある。

このように本チームは本領域ソフトウェアの開発と普及に努めエンジニアリング産業の技術力向上に貢献するものである。

○ハウステンボス・プロジェクトチーム

代表者 齊藤 繁喜 (株)日本設計 取締役 建築設計部長 (当時)

同 郡 公 剛 (清水建設(株) ハウステンボス建設所長 (当時))

メンバー 川原 政光 (日本国土開発(株)) 渡部 豊 (鹿島建設(株))

金丸 健二 (大成建設(株)) 川原 克之 (三井不動産建設(株))

本チームは、ハウステンボス建設プロジェクトの計画・実施において中心的役割を担い、自然環境の保全に配慮して一連のエンジニアリング業務を遂行した。特に、水環境を中心とした「環境創造エンジニアリング」は、生態系を大切に守りながら、人間が快適に暮らす住環境の創造を目指すもので、具体的には、以下に掲げる多くの新技術を開発、実施しており、エンジニアリングの新領域開拓に貢献した。

1. 6,000メートルに及ぶ閉鎖性運河の水質浄化のために、干満を利用した外海水の導入・循環による水質保全のモニタリング及び評価システム、および水中転倒堰・水中ファン等の設備の最適配置等を検討するためのシミュレーションソフトを開発し、その目的を達成した。

2. 遮水性のコンクリート護岸を廃し、透水性の親水護岸を採用し、自然利用によっても水質浄化を実現した。また、道路・広場等をレンガ舗装にすることによって、雨水が地中にしみ込み、生物を育て、自然の浄化を経て運河に出ていくようになっている。

3. 生活排水等は100%回収され、高度な浄化処理によって、中水として再使用され、さらに、この中水も再々処理され、樹木への散水等で地中に戻されている。したがって、汚水を直接、大村湾には一滴も流していない。

4. 世界初の水中防波堤(フレキシブルマウンド)を港の入口に設置して自然の眺望を妨げない、海水流を妨げない、魚の移動等生体系を変化させない、環境の保全、船の出入りが自由であるなどの効果を上げている。

○マレーシアSMDSプロジェクトチーム

〔日揮㈱〕

代表者 森^{もり}本^{もと}省^{しょう}治^じ（日揮㈱ 国際事業本部）

SMDSプロジェクトチーム プロジェクトマネージャー（当時）

メンバー 98名

本プロジェクトは、マレーシア国サラワク州ビンツル市において、天然ガスを原料としてケロシン／ナフサ／ガスオイル等の中間留分からワックスまでの製品を合成する世界初の商業プラントを完成させるもので、1989年6月に同社は設計、機材調達、土木／建設工事ならびにプレコミッションングのフルターンキー方式／ランプサム契約で受注し、予定通り、1993年3月にプラントの引渡しを完了した。本プラントの主要プロセスは、オランダ・SHELL社の特許のものを使用しているが、商業化に際して、既存の設計手法・概念では解決できない問題や実績のない機材の製作・据え付け、また、プラントの価値を高めるために、より付加価値の高い製品を精製する装置の追加など、パイオニア・プロジェクトならではの困難に遭遇した。これらの困難に客先と一致協力し、積極的に問題解決に取り組み、納期通り無事完成させた。これにより、客先から本チームの技術力／プロジェクト遂行能力が高く評価された。

本プロジェクトの実績を踏まえ、今後、クリーンな天然ガスの利用の道が広がることが期待されるとともに、石油の代替エネルギー源確保の観点からも意義の深いものであり、このようなプロジェクトを本チームが成功裡に遂行したことは、我が国のエンジニアリング産業に対する評価をより一層高めるものである。

〈グループ表彰〉 環境国際貢献

○中国・華能珞璜発電所排煙脱硫プラント建設プロジェクトチーム

〔三菱重工業㈱〕

代表者 根^ね本^{もと}弘^{ひろ}之^{ゆき}（三菱重工業㈱）

エンジニアリングセンター プロジェクト主務（当時）

メンバー 50名

中国・重慶市は、中国一の人口1740万を抱える工業都市であるが、周囲は山に囲まれ盆地に位置するためスモッグが停滞し、降雨PHは常に4～5と酸性を示している。このため、腐食などによる直接経済損失は毎年5～6億元にも達するといわれており、喘息など人体に及ぼす影響も深刻となっている。しかし、この地区の給電状況は非常に悪く、火力発電所の建設が望まれていた。

本プロジェクトは、重慶市郊外の珞璜地区に建設される360MW×2 缶石炭焚火力発電所に中国国内初の本格的な大型排煙脱硫装置を設置するというもので、1988年に設計を開始、幾多の苦難を乗り越えて1993年5月に全てのプラントの引渡しを完了した。

脱硫設備を設置したことにより年間15万トン程の硫黄の排出が低減されることになり、環境改善に大きく役立っている。本プラントが初期計画どおりの性能でもって実用運転に入ったことから、中国各地から排煙脱硫設置の検討問い合わせが殺到しており、客先は脱硫の専門会社を設立、これに対応している。また今後の中国国内の脱硫装置の普及のために、技術移転と人材育成のトレーニングも実施している。

このように本プロジェクトは環境国際貢献としてのパイオニアプロジェクトの一つで、わが国エンジニアリング産業の評価を高めるものである。

〈個人表彰〉 国際協力

○^{しみずかわ}清水川 ^{こうじ} 洽 二 (株)竹中工務店 国際事業本部 副本部長)

昭和15年3月13日生

氏は1962年に入社以来、構造系のエンジニアとして東京電力大井並びに袖ヶ浦火力発電所新築工事を含む多くのプロジェクトに従事したのち、1974年9月からケニアにおけるモンバサ空港新築工事の作業所長となり、厳しい環境条件下、幾多の困難を克服し、成功裡に竣工に導いた。

また、この空港工事の実績が評価され、1979年2月からはシンガポールのチャンギ新国際空港ターミナルビル新築工事の作業所長として着任し、現地スタッフを指導しつつ23万㎡に及ぶ大工事を、高品質を保ち、かつ工期内に無事に竣工させ、現地政府その他関係者から高く評価された。

チャンギ空港の竣工後、同社の駐在員事務所長に就任したが、氏の施工技術、エンジニアリング技術の豊富さとローカルスタッフへの熱心な教育・技術移転が注目され1983年4月には外国人としては初のシンガポール建築産業開発局のボードメンバーに任命された。また、公共事業省からの諮問に答えたり、シンガポール建築産業発展のための提言をするなど、その活躍ぶりは現地政府から高く評価されている。

その後、同社ヨーロッパ地区総支配人となり、延18年間にわたり海外に駐在した。これら海外における大型建設工事への取り組みや政府機関への協力により、わが国エンジニアリング産業に対する評価を高めた。

○^{とみせ}富 瀬 ^{みなみ} 南 (株)鹿島建設 建設総事業本部東京支店 海外建設部統括部長)

昭和16年1月11日生

氏は1970年1月以降1992年6月まで通算22年近くにわたり、シンガポール、スリランカ、インドネシアの東南アジア3ヵ国においてドック、空港等インフラ建設プロジェクトに従事した。なかでもシンガポールにおいては1970年から14年もの間、三菱シンガポールドック工事、ケッペルトラス造船所工事、メルバウ島敷地造成工事など合計12ものプロジェクトを手掛け、その全てを迅速かつ高品質にて完成させた。シンガポールの産業経済発展の一翼を担ってきた氏の功績は、同国の産業経済関係者から非常に高い評価と信頼を得ている。

またスリランカにおいても、氏はこれまでに培ってきた豊富な知識と経験を活かしコロンボドライドック及びコロンボ国際空港を完成させたが、これらは、スリランカの最重要産業施設として同国の発展に大きく貢献している。

氏の手掛けたプロジェクトは、いずれも工期面、技術面で非常に困難を伴うものであったが、氏の強い責任感と卓越した指導力、技術力が遺憾なく発揮され、全てのプロジェクトを成功裡に完成させることができた。またこれらのプロジェクトにおいて、現地の技術者への技術指導、マネジメント教育に尽力し、その国の将来を担う有為な人材の育成に寄与した。

○^{とら}虎 ^{たに}谷 ^{とし}俊 ^{ろう}朗 (大成建設(株) 国際事業本部営業部 部長)

昭和13年2月23日生

氏は、1966年のマレーシアマダ河灌漑計画ムダダム建設工事を皮切りに多数の海外プロジェクトに従事し、在外期間は灌漑事業だけでも8年、海外工事では通算17年以上である。

ムダ河灌漑計画は2つのダムを造り中間を6kmの水路トンネルで結び湛水量17億トンの水源を作る工事であった。

1974年よりクエートドーハ火力発電所の土木、建築工事に従事し、1977年からナイジェリアカナ精油所の土建工事を作業所長として遂行した。

1982年に始まるナイジェリアエヌグ灌漑工事では作業所長として政情不安と経済の悪化で苦しむアフリカの人達を飢えから守る道を造るため、5,000ヘクタールの米作灌漑の施工を指揮した。その後ナイジェリアエヌグライスマイル工事の作業所長を経て、1989年からのケニアムエアの灌漑工事の所長となった。ここでは、氏のナイジェリアでの経験を基に、元来雨期にしか耕作出来なかった稲作を乾期でも利水出来る二毛作が可能な水路を作り、農民に大きな希望を与えた。

また、夜には夜間学級を開き、ただ水を与えれば米は自然に実るのではなく、水田は農家全員で手入れする事により、米が出来ると言うことを多くの農民に教えてきた。工事後半では、氏の人柄に打たれ設計にない道路整備を農民自らの手で行うまでに至った。このように氏は施設の建設だけでなく、その国の人々との心の交流を通じて真の国際協力、友好の推進に努めた。

〈個人表彰〉 協会活動

— 協会創立15周年 —

○石 崎 秀 武

清水建設(株) 技術開発センター 土木生産技術開発部長

長年にわたり地下開発利用に係る研究開発等の諸活動に貢献するとともに、地下開発利用センター設立後はマスタープラン専門委員会幹事長として同センターの事業活動の企画推進に中心的役割を果たした。

○大久保 弥 太

日揮プランテック(株) 取締役社長 (日揮(株))

昭和61年より7年間にわたり、安全法規研究会の委員長として安全法規に関わるエンジニアリング産業の課題調査等の諸活動の推進に指導的役割を果たし、この分野におけるエンジニアリング産業の役割普及に努め、多くの貢献を行った。

○小 原 重 信

名古屋商科大学 産業経営学科教授 (川崎重工業(株))

昭和59年より人材育成委員会の分科会長、あるいは副委員長、人材育成部会の副部長等として、また講習会講師などを務め、エンジニアリング産業の人材育成のあり方、人材開発等の調査研究に中心的役割を果たし多くの貢献を行った。

○川 西 勝

日揮(株) 経営企画室 管理チームマネージャ

昭和55年より情報調査委員会分科会長を2年間務めた後、昭和57年より現在まで12年にわたり白書専門部会の委員、主査、部長などを務めエンジニアリング産業白書の継続的刊行とその充実に中心的役割を果たし多くの貢献を行った。

○高 部 素 行

清水建設(株) エンジニアリング本部 副本部長

昭和61年より研究開発委員会委員を務め、産業第一研究部会長(61、62年)として、また企画グループの主査(平成4、5年)として社会開発型システムの研究の企画と推進に中心的役割を務め多くの貢献を行った。

○茶 木 康 一 郎

東洋エンジニアリング(株) 前任理事 技術企画・管理本部長

昭和59年より海外会議、国際協力部会、研究開発委員会、シンポジウム(平成元年度プログラム部会長)、安全法規研究会(平成5年度委員長)、等の多くの活動において中心的役割を果たし事業の推進に貢献した。

○寺 奥 博

(株)大林組 エンジニアリング本部 企画部長

昭和58年より情報調査委員会(61年度副委員長)、海外会議、国際協力部会、シンポジウムプログラム部会(計画幹事)、総合企画委員会等の多くの活動において中心的役割を果たし事業の推進に貢献した。

○橋 本 幸 雄

(株)新潟鐵工所 顧問

昭和61年度以降、プロジェクトエンジニアリング委員会委員を務め、この間63年より4年間標準整備部会部会長としてエンジニアリングに関わる標準化の推進を指導し、多くの貢献を行ったほかシンポジウムの企画運営においても指導的役割を果たした。

○平 岡 正 勝

京都大学 工学部教授

昭和55年以来、廃棄物の処理、輸送、エネルギー利用などに関し協会に設置された数多くの委員会の委員長を務め、協会の環境技術システムに関わる研究開発の事業推進を指導し、多くの貢献を行った。

○森 村 恭 郎

千代田化工建設(株) 専務取締役

昭和55年より4年にわたりプロジェクトマネジメント委員会幹事長を務め、63年から総合企画委員会の委員または委員長として協会活動の推進に指導的役割を果たした。またプロジェクトエンジニアリング委員会委員長、シンポジウムのプログラム部会長としても事業の推進に貢献した。